

波瀾万丈の八〇年

◎誕生と父の死

長承二年（一一三三）、法然は漆間時国を父とし、秦氏出身の女性を母として、美作国久米南条（現在の岡山県久米郡久米南町）に生を受けました。父の時国は、勢至菩薩にあやかっつて我が子を「勢至丸」と命名します。ですから、幼年の法然は本来、勢至丸と呼ぶべきですが、ここでは分かりやすく法然と呼ぶことにします。

九歳のとき、法然に悲劇が訪れます。時国は地方豪族であり、押領使という地域の治安維持役を担っていましたが、莊園領主に代わつて現地で莊園経営にあたつていた預所の明石定明の夜襲に遭い、殺されてしまつたのです。

莊園の支配関係が混乱していた当時、役職上、押領使と預所とは利害が対立する関係にあり、両者はしばしば衝突していました。明石定明の夜襲に遭つて深傷を負い、亡くなる寸前に時国は息子の法然を枕元に呼び寄せ、「決して敵を恨むな。これも前世の報いだ。お前が敵を恨めば、その怨みは代々にわたつても尽きがない。はやく出家して私の菩提を弔い、お前自身も解脱を求めよ」と遺言しました。

やられたらやり返すという当時の武士の常識から考えれば、定明は法然の復讐を恐れました。息子の法然を生かしておくことは自分の身を危うくすることになるからです。逆に法然からすれば、定明に居場所を知られぬよう、身を隠す必要がありました。そこで、法然は実家の近くに、ある那岐山の菩提寺の住職をし、また母の弟でもあつた叔父の観覚に引き取られます。

観覚は法然の非凡な能力に気づくと、自分のもとにとどめ置くのはもつたないと考え、当時の仏教の総合大学ともいべき比叡山に法然

【勢至菩薩】

阿弥陀仏の智慧を司る菩薩。阿弥陀三尊の一つで、観音菩薩がその慈悲を司るのに対する存在。

【出家】

世俗の生活を離れ、修行の道に入ること。

【菩提】

仏教的には煩惱の迷いから目覚めたさとりの内容を表すが、ここでは一般的な死後の冥福のこと。

【解脱】

苦から解放されたれ脱すること。また、迷いの世界から解放された真の安らぎの世界、涅槃（さとり）の境地も意味する。

行動することの重要性 清涼寺参籠と南都遊学

皆さんは考えてから行動するタイプですか。あるいはまず行動してから考えるタイプですか。どちらもそれぞれメリットとデメリットがあるでしょうが、ここでは行動することの重要性について考えてみたいと思います。

時代が進むにつれて、心の働きの優位になります。それに伴い、体は後退してしまいます。体をフルに使うスポーツでさえ、最近ではeスポーツが流行し始めていますし、ヴァーチャルリアリティやメタバースなど、脳や心の働きばかりが強調され、それと反比例するように、身体性は忘れられつつあります。

しかし、人間は身体を有する動物です。これを忘れてはなりません。人間は体を持たない霊的な存在ではないのです。身体性が欠如する現代、法然の行動を手がかりに、体で行動することの重要性を考えてみましょう。

●清涼寺参籠

第6話では、法然の二五年の引き籠もりについて説明しましたが、その間、法然はずっと黒谷くろやに留まっていたのではありませんでした。一八歳で黒谷に籠もり、四三歳で回心するまでの二五年間、一度だけ黒谷を出て、今も京都市内に建つ清涼寺せいりやうじに参籠さんろうし、またその後、南都なんとへと遊学に出かけます。清涼寺参籠に関して、伝記には次のように記されています。

保元元年（一一五六）、上人が二十四歳の時、叡空上人えいくうに暇を願ひ出て、嵯峨さかの清涼寺に七日間の参籠をされたことがあった。求法のこ

こだわらない生き方 生けらば念仏の功つもり

時間の流れは昔も今も同じはずなのですが、時代が進むにつれて、そのスピードは速まっているように感じます。新幹線に代表されるように、乗物のスピードはだんだん速くなり、移動の時間は短くなっていますから、そのぶん余裕のある生活ができていくかと思いきや、余計に忙しくなっているようにも感じます。

忙しいだけなのですが、時間に追い立てられるように生活して余裕がなくなり、さまざまなことに思い煩っているのが現代人です。科学技術の発達により、我々の生活は便利で楽になっっているはずなのですが、かえって昔の人よりも思い煩っているようにも思えます。もう少し余裕を持つて「おおらか」に生きたいものですが、どうすればいいのでしょうか。

うか。

◎生死ともに煩いなし

序章第1話で見たように、波瀾万丈の人生を送りながら、法然はどこか余裕を感じる生き方をしたように思います。私の表現では、心に「遊び」があるのです。汲々としていないのですね。それを象徴する表現を紹介しましょう。

生きている間は念仏の功德くどくを積み、死ねば浄土へ参るであろう。いずれにしてもこの身には、なにも思い悩むことはないと思つたらならば、死ぬことも生きること、ともに悩むことはない。 (二一・一一)

実に「おおらかな生き方」と言うほかはありません。こんな心境で暮らせば、本当に幸せだなと思いますし、私もこんなふうに生きていき

能力の有無でなく自分の道を歩む

阿波介の姿勢

最近はずつかりになり、何でもすぐに答えを出すことが求められます。教育の世界でも、効果の即効性が求められ、そのような教育方法のみがもてはやされますが、このような価値観で育った子どもは将来、どうなるのでしょうか。しっかりと腰を落ち着けて物事を考えることができなくなるのではないかと心配します。

能力には人それぞれに個人差があり、そのパフォーマンスにも差があるのは確かです。野球の大谷翔平を見れば明らかですね。しかし、能力の差にかかわらず、どんな人でも懸命になつて一途に物事に当たれば、いつかは結果が出るものです。すぐに結果を出すことばかりを考えず、

真摯に答えを求め続ければ結果は自ずと出ることを、法然の伝記から紹介しましょう。

◎阿波介という人物

法然の教えにはさまざまなタイプの人びとが帰依しましたが、その中に阿波介あわのすけという陰陽師おんみょうしがいました。どんな人だったか、『新纂浄土宗大辞典』から紹介しましょう。

阿波介は人の心を誑かし、謀はかりごとによつて人の目を欺く、放逸にして邪見の者でした。富める長者であり、七珍万宝と七人の妻を得て、日に三度、妻たちを裸にして柱に縛つて杖で叩き、その啼き声を酒の肴さかなにしていたようです。

あるとき播磨国はりまのくにに行く途中で道に迷い、通常三日の道程に七日をかけました。今生こんじょうにおいても旅路には道案内が必要であるのだから、ましてや浄土おんじょうに往生するには善知識ぜんちしきが必要であると思ひ至り、即座に道心どうしん（さ

【陰陽師】

一般には中世以降、民間で加持祈禱を行う者をいうが、阿波介は民間で占いをして、人を誑かし欺いていた。

【善知識】

浄土教では往生浄土や念仏の教えを説く導き手を指す。くわしくは三〇四頁。